Initiatives of Change
一人ひとりのチェンジで信頼を築く

IC ニュース NEWS

Vol.27

公益社団法人　国際IC日本協会

発行年月日 2020年11月25日
発行所 公益社団法人 国際IC日本協会
〒160-0004 東京都新宿区四谷4-28-20
パレ・エテルネル206号
TEL：03-6273-1428 FAX 03-6273-1429
E-Mail：info@iofc.jp HP：http://iofc.jp
<International IofC>HP：www.iofc.orc

頒価 1部 100円

ピンチをチャンスにするには　会長　矢野 弘典

10月24～25日に開かれた第42回国際フォーラムは、外国から大勢の若者の参加があり、大変盛り上がりました。Zoomの偉力を実感した二日間です。テーマは『危機における変革力～ピンチをチャンスに』でした。開会の挨拶でも述べたので重複しますが、改めて考えてみたいと思います。

ピンチをチャンスに転ずることは、人生の究極の課題とも言えます。家庭、国、ビジネス、教育、天災や疫病など、身の回りには大小を問わず危機的状態が現れます。その克服は誰しもが願いますが、簡単にはかないません。なぜでしょうか。

ご参考までに、3000年来東洋に伝わる箴言を紹介します。

「窮まれば変ず、変ずれば通ず、通ずれば久し」『易経』にある言葉ですが、この本はBook of Changeとも呼ばれ、変革の原理を説いています。A.トインビーもこの本に励まされ有名な『歴史の研究』を著したと伝えられています。

この言葉は、絶頂期も最悪期も決して永くは続かない、必ず変わる、だから良い時にも驕り高ぶるな、悪い時にも希望を失うなと説いています。状況の変化点を転機といい、転機には必ず兆しが現れる、その兆しを捉えなさい。そのためには、現場主義に徹して感度を磨くほかはない、と教えています。「あの時が転機だった」と後で臍を噛むことがままありますが、それこそ後の祭りなのです。

兆しは初めは小さく、次第に大きく、耳に聞こえ目に映るようになります。できるだけ小さいうちに気づいて、良い芽は育て、悪い芽は摘めば良い。不祥事も、手が付けられなくなる前に防ぐことができる。これは預言とか予知能力とは全くの別物で、現場にあって全力投球で生きている人には、必ず分かるようになる能力です。現場は、家庭、地域社会、仕事の場など身近な所にあります。総論や原理はむろん大切ですが、兆しは現場にしか現れません。そのメッセージを捉えなければ、現実を変えることはできないのです。

フォーラム参加者の話は、切実な事態に直面し、静かな時間を持ち、内なる声に従って実行している勇気ある経験談であり、深く心に響きました。自分を変革し、身の回りを変革し、国や社会にそれを及ぼそうとする試みです。空論・評論ではありません。そうした歩みを共有し、助けあい、人的な絆を世界に広げたいと思います。そして、献身的に働いている人々を、国境を越えて皆で支援し、心ある次世代を育てていこうではありませんか。

事業の振り返りと今後の方向性　副会長・専務理事　足立 憲昭

今年度の事業の振り返り

国際 IC 日本協会の令和２年度は、前年に発生したコロナ禍の中、東京都江東区有明で行われた３月14日の会員総会からスタートしました。その後、新型コロナウィルスの拡大により、４月７日には、緊急事態宣言が、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、大阪府、兵庫県及び福岡県の７都府県に対し、新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づいて発令され、その後４月16日には、緊急事態宣言が全都道府県に拡大した。マスク着用、手洗い、うがいなどの衛生管理の徹底に加えて、海外渡航の制限、国内での県を越える移動自粛、ソーシャルディスタンスが今も続いています。

海外渡航の制限から、春開催の「学校訪問プログラム」、夏開催の「日中韓フォーラム」の２つの公的事業が中止となり、秋開催の国際フォーラムもオンライン開催（10 月 24~25 日）となりました。コロナ禍の影響は、令和 3 年度も継続することが予想され、どのように公的事業を行うか、発想の転換が求められ、理事会や各事業のプロジェクトチームを中心に検討が行われた。

令和２年度に唯一開催できた「国際フォーラム」では、初体験のオンライン（Zoom 利用）でのメリットを最大限に活かす試みが行われ、課題であった「学校訪問プログラム」や「日中韓フォーラム」との連携が実現し、それぞれのプログラムにおいて、過去のプログラムに参加したメンバーが体験談やこれからの提言を行った。この状況から、令和２年度の「（拡大）国際フォーラム」は、「学校訪問プログラム」「日中韓フォーラム」「国際フォーラム」の３つの公的事業がオンライン実施されたと位置付けたい。

ただし、今後解決すべき課題として、オンラインでの開催に年配の会員の参加が少なかったため、今後、より多くの年配会員が参加できるようなサポートであり、ご家族の協力を含めてお願いしていきたい。

来年度の事業の方向性

３つの事業の連動を深めていく、具体的には、秋に開催予定される「（拡大）国際フォーラム」と「学校訪問プログラム」のを同時期に行ない、そのプログラムの中で、学校訪問プログラムで来日したメンバーを交えたワークショップを行う。また、「日中韓フォーラム」との連動も継続していく。

ICインターナショナルとの連携を深めていく、特にインド（パンチガニー）、韓国（MRA 本部）、スイス（コー）との連動は、一部の人々に頼っている現状を脱皮するため、国際 IC 日本協会の会員が、これらプログラムへより多く参加できるように支援していく。

国際 IC 日本協会が、戦後の日本で果たしてきた役割や実績をアーカイブスとして残していく。この活動は、IC インターナショナルとも連動していく。具体的な、進め方は理事会が中心に、プログラムを検討していく。

公的事業として、「オンラインで行う交流会や勉強会」を、一般の人々（会員外）が参加しやすいように、プログラム内容を改善する。さらにオンライン会議のメリットを活かすため、各地域に分散する元会員や一般の人々が期待するプログラム内容を検討する。

2020 IC 国際フォーラム振り返り　副会長　大隈 尚子

去る10月24日から25日まで、「危機における変革力～ピンチをチャンスに～」をテーマに、副題を「私たちはどんな未来をつくりたいのか」とする第42 回国際フォーラムが初の試みによるオンライン会議にて開催されました。

矢野会長による開会の辞の後、IC の掲げる、絶対正直・純潔・無私・愛という精神に自分の在り方を照らし合わせ、心の奥の声に耳を傾け、内省する時間の導入をオーストラリアのジーン・ブラウン女史によりご説明頂き、静かな時間を持つ大切さを学び直しました。ICインターナショナル会長、スレッシュ・ヴァジラニ氏による基調講演では、2021 年に MRA/IC 発足 100 年を迎えるに当たり、次の100年計画に向けた取り組みを紹介され、参加者の共感を得ました。同氏は９年間のフルタイムワーカーを経てインド最大の多国籍医療診断会社を創業、その企業理念は人、社会、国への奉仕の精神を第一義とし、コロナウイルス感染拡大の収束が未だ見られないインド国内に於いて需要の伸びる製品開発に多忙な日々を送られております。レバノンからは、弁護士のラメス・サラメ氏及び大学講師で学校訪問プログラムに参加されたワディア・コーリー女史に録画ビデオによる講演で貴重なメッセージを頂きました。第１日目最後のプログラム、インド IC チームによるセッションでは、今回のフォーラムテーマに沿ったラビ・ラオ博士の講演、３人のイ

ンターンシップ経験者の心打つお話しを聞き、アジアプラトー責任者のジダラット・サイン氏は、視聴者に、「一人一人が5人のメンターになる覚悟を持つように」と語り、日本とインドの更なる信頼関係の構築を訴えられました。第２日目は、ジェームス・コーディナー氏がクワイエットタイムについて、多忙であっても静かな時間を持つ大切さを語られました。今年度実施中止となった日中韓フォーラム参加者は、これまでのフォーラムを振り返り深く掘り下げたフリートークを展開され充実したセッションとなりました。学校訪問プログラム参加者によるセッションでは、過去の参加者がオンライン会議に集い、日本での経験と現在の活躍状況を語って頂きました。18年史発刊に向けてプロジェクトチームが現在作業をされております。

今回のフォーラムを通じて、心の声に従い、人種、宗教、文化の違いを乗り越えて共に学び、共生してゆく道を模索していく重要性を再確認し、参加者の絆を更に強めた会議となりました。ご参加下さった全ての皆さまに感謝申し上げます。

◆インドのアジアプラトーへのご寄付の御礼

1968年インドのパンチガニーに建設されたアジアセンター、アジアプラトーが本年３月にコロナ禍により厳しい運営状況に陥り継続が困難となりました。

世界のIC活動の中心ともなっているアジアプラトーへのご寄付を募りましたところ、大変多くの方々からご賛同を頂きました。寄付金総額は1,773,500円となり、8月31日に送金手続きを完了致しましたことをご報告申し上げます。

皆さまの温かいご支援に心より感謝申し上げます。感染拡大により厳しい日々が続きますが、どうかお身体を大切にお過ごしくださいますようお願い申し上げます。

発起人一同

日中韓セッション感想文　須崎 純史

まずはじめに国際IC協会の皆様、先日はあのような貴重な機会を頂きありがとうございます。国際フォーラムにおいて日中韓セッションの場を設けて頂き、また多くの方々の応援とご支援があり日中韓フォーラムの参加者OB・OGが今回集いセッションをおこなう事が出来ました。

日中韓セッションはとても有意義な時間にできたのではないかと思います。今まで日中韓フォーラムに参加したOB・OGが集う機会はなかなかありませんでした。もちろん個人単位では会っていたり連絡を取り合っている事はありました。しかし今回のような、今後の日中韓フォーラムについてOB・OGが真剣に考え意見交換する、そこを通じて新たな繋がりやアイディアが生まれる事は私が関われせてもらう中では初めての事でした。

ここで、当日の発表までの準備について少し書かせて頂きます。

2020年9月中旬の事、成さんより今回のフォーラムの案内を頂きました。開催まで１ヶ月、ヤバイ、、、準備できるイメージが殆ど沸きませんでした。しかし、成さん、本間さんを中心にフォーラムのゴール・内容、人の集め方、どのように運営すべきか、リードタイムの計算等一緒に考える事ができ、またフォーラム参加者には事前準備段階でのプロフィール作成や難しい議題のあるアンケートへの回答などに全面的協力してもらえました。

他の多くのOB・OGにも声をかけたのですが、「参加したいが日程が合わない」という方々もとても多かった状況です。このような短期間の間にできたのは偏に参加メンバーの日中韓フォーラムに対する熱い思いがあったからだと実感しております。OB・OGが過去にフォーラムに参加して得た財産があるからこそ、また集い行く末について真剣に話し合いができたのだと。

今後はこのような機会を定期的に設ける事で日中韓フォーラムのさらなる発展に繋げ、IC協会の皆様との交流も加速させ幅広い年齢、国籍の方々と交流を広げていきたいと考えております。至らぬ点の多い若輩者ですが今後とも宜しくお願い致します。

IC学校訪問プログラムのセッションを振り返って　長野清志（学校訪問プログラム・コーディネーター）

2002年に試験的にスタートした学校訪問は、2009年からは財団法人MRAハウス（現一般財団法人）の助成金を受けて（2019年は一般社団法人東京倶楽部からも助成頂く）2か月余の期間となり（2015年からは、1か月余に短縮）更に多くの小学校から大学までを訪問することが可能となりました。2009年から19年（17年は休止）の10年間に、小学校から大学までの延べ248校、約2万人以上の生徒・学生の方々と交流しましたが、国際理解教育と心の教育を併せ持ったこのプログラムは各地で好評を得ました。今回のICフォーラムには、その10年間に来日した16か国・地域の38名の青年たちのうち、11名（台湾、インドネシア、ケニア、ベトナム、チベット、インド）が参加してくれましたが、彼らが日本での滞在中に学び、その後、生活していく中で活かしていること、また、それらの体験をいかに彼らの地域社会の中で活用しているかを話してくれました。インドの東北部のナガランドの女性は、日本の小学生が、「日本が60年以上、戦争していないことを誇りたい」と言ったことに感銘し、紛争を抱える彼女の地域で会う人々にそのことをしばしば伝えながら、融和を訴えていると話しました。同じく、彼女の妹さんは、日本で学んだ、公衆衛生、リサイクル、緑地保全、廃棄物処理等に触発され、環境保全・改善のボランティア活動に励んでいることを、インドネシアの女性は、日本での学校訪問の経験が彼女の教師としての仕事に大いに役立ったこと、同じくインドネシア・パプア州で識字教育などのボランティア活動に従事している青年も、日本での教育システムから多くを学んだと語りました。

詳しくはこの会議の報告書に譲りたいと思いますが、彼らが日本で沢山の生徒・学生に多くを与えてくれたと同時に、日本での様々な経験が彼らの人生にとっても大きな糧となったことを知り嬉しく思いました。

2020年IC国際フォーラム　中島 信子

2020年IC国際フォーラムは人類初ともいえるコロナウイルス・パンデミックによって国の内外を問わず一堂に会することが出来ない中、初めてのオンラインによる開催となり、フォーラム準備会では全員手探りで一歩一歩進めてまいりました。

冒頭の開会のことばでは、矢野会長から今年のテーマ「危機における変革力～ピンチをチャンスに～」副題「私たちはどんな未来をつくりたいか」に沿って、“儒教の教えに「窮まれば変ず、変ずれば通ず、通ずれば久し」とあるが、切羽詰まった時、人は必ず良い方向へ変えようとする。現場主義を重んじ、努力を惜しんではいけない、という教えは今回のテーマと相通ずるところがあり、昔の中国でも同じことが既に言われていた、との興味深いお話しで始まりました。

基調講演では、インターナショナル会長スレッシュ・ヴァジラニ氏が自身の医療機器会社でコロナ感染予防の検査機器を開発、製造されインドの多くの国民の健康が維持された、との話を頂き、また、レバノンのラメス氏、ワディア女史からは同国の汚職や経済危機に加えて8月の大爆発事故後の荒廃した地域の復興に向け、ICの仲間と民族や宗教を超えて協力し合った話、また、インドセッションではラビ・ラオ氏、リーナ・カトリ女史とAPで訓練を受けた3人の若者からの報告があり、インドのコロナ禍での帰還移住者への人道支援、チベットでの人権活動など、ICならではの感動する話を聞きました。カトリ夫妻が実施される、AP青年育成プログラムへ日本からも若者の参加を、との呼びかけに是非応えたいと願っています。更に、日中韓青年会議の青年らのダイアローグ、学校訪問プログラム海外参加者同窓生らの現況報告ではICで学んだことを基礎とするそれぞれの活躍が頼もしく、同プログラムで培われた絆の大切さが感じられました。

日英言語の通訳が入るオンライン会議という機械技術面での課題は今後、その進歩と共に安価で聴きやすい方法が導入されるものと期待し、初めてのオンライン・フォーラム開催でご協力、ご尽力下さった事務局の方々、通訳の方々に、準備会の一員として心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

事務局からのお知らせ

- ●コロナ禍のため、初めてのオンライン開催となった「国際フォーラム」から早くも1か月がたちました。今号と来年新春号（1月発行予定）とで関連するご寄稿を掲載いたします。
- ●来年の会員総会は、3/14（日）の予定ですが、オンライン開催となるのかどうかを含めて詳細は決定次第ご連絡申し上げます。
- ●今年は、コロナの影響をまともに受けた1年となりました。来年が皆様にとってよいお年となりますように祈念しております。（なお、事務局は、12/26～1/5まで年末年始の休みになります）。